

第5章 実験を終えて

佐々木 正 實

今回我々は、講座番組の演出研究にいままでなかった切り口を持ち込んだ。特に「立ち」をベースにした動きのある講義と、講師が主体的に番組の進行をリードしてゆく「柔軟な演出」を提起したことの意義は大きい。

一連の実験を通して、この発想に対する自信は深まった。しかし、これを数字の上で実証できたとは言えない。以下、その理由を述べたい。

仮説の検証実験は、本番の収録時に行われた。「実験のための収録」では、もともと緊張感に乏しく、今回のテーマには馴染まないと判断したからである。「本番」を利用することが不可欠であった。

しかし、本番であるがゆえに、実験はむづかしかった。実験のために、番組の質が低下することはゆるされないからである。これが、仮説の検証作業を難しくした第1の理由である。具体例をあげよう。担当ディレクターが、ある仮説の正しさを確信した結果、自分の番組を少しでも良くしたいために、工夫を加えた演出を実験のルールを無視して実施してしまうといった現象がおきたのである。これは、「従来型の演出」と「特定項目のみ工夫を加えた演出」とを比較するという実験にとっては好ましいことではなかった。「本番」を利用した実験であったがために生じた問題である。

第2に、実験を成功させるための条件設定が必ずしもうまくいったとはいえない。「白板前立ち」を例にとろう。これまで、放送大学番組では、「座り」を前提として全てが考えられてきた。例えば、図表パネル（パターン）のサイズである。今回の実験では、「座り」の時と全く同じサイズの図表パネルを「立ち」の場合にも使用してしまった。従来より大きくしなければならなかったのである。しかも狭いスペースにごちゃごちゃと貼りつける結果となり、どの図表を説明しているのか、講師自身が混乱してしまうケースもあった。

また、「パネル入れ込みの講師」でも、パネルが小さいために、講師の顔が相対的に大きくなってしまい、講師の緊張をやわらげることに繋がらなかった。教卓を置かなかったために講師が居心地の悪い思いをした場合もあった。アシスタントディレクターの動きが悪く、講義をやりにくくしたケースもあった。講師の動きに合わせてモニターを動かすことをしなかったのである。日頃「座り」が圧倒的に多いために、若いアシスタントディレクターが、「立ち」の場合のノウハウを習得する機会がなかったのである。もうひとつ付け加えれば「立ち」の場合、視線が比較的自由になることを、あらかじめ講師に伝えておかなかったので、講師は「座り」の時と同じようにカメラを凝視し続け、緊張が解けず、せっかくの工夫がねらった効果をあげなかったこともあった。

「立ち」でやるからには、細かなところまで「立ち」にふさわしい配慮をしなければならなかったのに、それをしなかった。その結果「立ち」の良さが十分には発揮できなかったのである。

第3に、欲張って6つの項目について実験を行ったことがあげられる。そのために、ひとつ

の実験項目についてのサンプルが少なくなってしまう、統計的な意味を薄れさせてしまった。
今後は、それぞれの仮説に伴って派生する問題について十分な検討を加え、条件を整えたうえで、多くの講師について実験を積み重ねることが必要である。

ところで我々は、講師の過度の緊張が和らぎ、生き生きとした講義ができれば、番組の質は高まるという前提のもとに研究を始めた。この前提にも検証を行う必要があろう。工夫を加えた演出が、番組効果の点ではどうなのか、つまり視聴者の側からの評価測定である。

いずれにしろ、このプロジェクトが提起した問題意識を大切に、講座番組をはじめ解説番組など様々なストレート番組の質の向上につながる「講師にやさしい演出の研究」を続けていくことが大切である。